

神経眼科学を学ぶ人のために 第3版

三村 治 著

私自身、神経眼科学については、系統立った教育を受けず、眼科医として仕事をしている。したがって、この領域は正直いってあまり得意ではない。苦手といってもよいかもしれない。そういう私が頼りにしている一冊が、三村治先生の執筆による『神経眼科学を学ぶ人のために』である。おそらく、神経眼科学を基本から学ぶ入門書としても、どう診断するか迷う症例の答えを探すときにも多くの眼科医が手に取っているのではと思う。

今回、改訂第3版が発刊され、これまで以上に見やすいイラストと懇切丁寧に解説された臨床画像が満載されており、さらに頼もしい一冊になっている。専門外の者にとっては、神経眼科学疾患を前にして、どう診察を始めていいか迷うことが少なくない。そういう気持ちを察するかのように、診断のコツ、そして優先すべき検査を明解に記述くださっているのがあるがたい。余裕のないときは、ボールドで印刷されているところに注意を払って読んでいくことで大切なことを逃さずに要点を整理できる構成になっている。治療についても、最初の一手からその後の経過の見方まで、豊富な経験と最新の知見をもとにポイントをしぼった形で記載されている。エビデンスの蓄積が待たれるような新しい知見や、専門家の視線で注目している事柄の記載がコラム「Close Up」として各所にちりばめられているのでじっくり読み込む楽しみもある。

近年の神経免疫学の進歩には目覚ましいものがあり、視神経脊髄炎関連疾患の診療は大きく変わってき

ている。神経眼科を専門としない者でも、視神経疾患を疑った場合は適切な治療へと患者さんを導いていくことが求められている。本書の「第3章 視神経・視路疾患」「A 視神経に腫脹をきたす疾患」は、今回の改訂を急がれた理由の一つであるが、このことは「序」で述べられているので、ぜひ繰り返し精読しておくべきと思う。

もう一つ個人的な感想になるが、私自身が最も苦手なことの一つに「眼球運動障害の診断」がある。診察しているうちにどうしても頭の中が混乱してしまい、すぐに専門家に相談できないときは、いくつかの成書を並べて確認しながらなんとか診断を行うこともある。本書の「眼球運動障害」の項は、図と豊富な症例の写真が使われていて、類書と比べて断然理解しやすい記述になっているので、同じ悩みを持つ方には、手元に備えておくことをお勧めしたい。

それにしても神経眼科の新しい知見を盛り込むために、2014年の初版から、約3年で第2版を刊行され、その3年半後に第3版をまとめ上げる著者の責任感と情熱には敬服するばかりである。繰り返しになるが初学者から眼科専門医まで、さらにORTや他科の医療者にとっても読みごたえのある名著である。

順大大学院教授・眼科学
村上 晶

B5・頁360 2021年04月

定価：本体9,500円＋税

[ISBN978-4-260-04636-7] 医学書院刊